



太鼓楼 - 自治都市・寺内町の防衛シンボル -

古来から鼓楼は鐘楼と並び寺院や廟院の重要な要素となる建物である。後に近世真宗の七堂伽藍にも太鼓楼が建築要素として登場するが、中世、勃興当初の真宗寺院建立に当たって、太鼓楼はいかなる歴史的役割を担っていたのであろうか。

真宗における太鼓楼の建立の経緯を詳細にたどると、真宗の寺院は古代の官制寺院（奈良・平安仏教）とはまったく出生を異にすることに気づく。

中世は古代の律令制度が衰退し、未だ新しい国家秩序が見えてこない、いわば歴史の真空ゾーンであった。そのような時代に、公権力の埒外におかれていた民衆が台頭して来るのは当然と云えば当然である。生産手段を自らのものとした「百姓」と呼ばれる山の民・海の民が、近畿を中心に経済的・社会的に大きな力を発揮するようになった。このような民間集団の交流を可能にする共通の信頼基盤を提供したのが仏法領としての寺院であったことは容易に想像がつく。彼らは自治都市、寺内町を形成し、地域の新しいシンボルとなった。

従って、播州・英賀（面積555,000平米）は、当初、このような民衆の興隆（英賀長衆・三木一族）に支えられて作り上げられた中世の灌漑

都市であり、この播州屈指の交易都市に真宗寺院・本徳寺（37,000平米）が創設されたことは歴史の必然でもあった。英賀は夢前水系の沖積三角州で、西を夢前川に、南を播磨灘、西を水尾川が流れ、北辺は湿地帯で周縁には土塁が積まれ、明らかに自治・防衛を意識した49町・860軒・人口約6000を有する灌漑都市であった。中世に瀬戸内海沿岸には急速に沖積地が広がる。おそらく鉄の生産と無関係ではあるまい。このような沖積地はしばしば水系の氾濫を起こし、古代の常識では御しがたい土地である。この沖積地を技術力をもった門徒集団（技術集団）が一大交易都市に作り替えていったことは注目に値する。

このような近畿を中心にした寺内町を含む中世の自治都市が、近年の歴史ブームも手伝って学術的に明らかにされつつある。（『寺内町の研究』法蔵館）特に、大坂本願寺が建立されてから以降は、瀬戸内海の流通航路を通して、播州・英賀が本願寺の勢力圏に参入し、本願寺グループの最西端拠点となったことは間違いない。今ではその痕跡を探すのにいささか努力を要するが、往時には播州最大の都市でもあり、多くの人や物が往還する、近郷では特筆すべき交

易都市の様相を呈していた。

山門（比叡山）衆徒による一四六五年の大谷本願寺破却以来の対立は、近畿各地での真宗勢力が興隆する中、既に危険水域を越えていた。本願寺の全国展開の下、播州以西における一向（真宗）勢力が、主に旧仏教からの転派によって進展していた事実は、既存の支配権力や天台系・真言系の衆徒（書写山宗徒・八正寺宗徒）をいたく刺激したに違いない。文献によると、たびたび本徳寺に押し入り狼藉が繰返されたことが知られている。特に、1525年5月3日には、書写山僧衆農夫数百人が御堂（本徳寺）に押し寄せて、梵鐘を強奪したが、すぐに門徒数百人が追いつけ取り戻した。（この梵鐘は文化財として亀山本徳寺大広間前庭に安置されている）その際、双方に戦死者が出るなど、当時の門徒が命がけで自らの法城を守ったことがうかがわれる。その後も、英賀の寺中寺院を破棄するなど、その攻撃は再三にわたった。この攻防戦は門徒の必死の防衛により、1568年を最後に終結する。

しかし、この頃からさらなる法敵、プロの武力集団の攻勢に脅かされるようになる。戦国大名、信長・秀吉の10年をゆうに費やした持久戦、石山本願寺戦争である。

このような臨戦下、英賀寺内では、出入各「木戸」(英賀では10門)に見張り台を持ち、敵対勢力に目を光らせたに違いない。檜の上から敵の攻撃を事前に察知して、楼上の太鼓を打ちならし、その音を聞きつけた近郷の門徒衆が寺内に駆けつけ、敵の攻撃に備えたようである。

中世の見張り檜は当初は簡素な木組であったと想定されるが、寺院に設置されたものは特有の意匠を創出し、太鼓楼として発展していった。本徳寺の現在の太鼓楼は亀山移築後のものではあるが、中世の実用的な防護施設の一部として出発し、真宗寺院の伽藍構成の重要な要素として定着したものと思われる。

本徳寺太鼓楼の建築の年代は17世紀中葉と推定されているが、明らかではない。寺の「建物覚書」には寺内の建造物の中で最古のものとされている。このたびの解体調査では建設時期を特定する棟札は見つからなかったが、懸魚裏面には「安永(1772～1778)」年号が墨守されており、(この懸魚は鼓楼中二階に保管されている)この頃に外部の大規模な修理が施されたようである。鬼瓦の調査からは、近世初期に作成された飾瓦(鬼面瓦)があるが、近代以降の製作によると思われる瓦も散見され、近世初期から近代に至る間に屋根部の修理が継続的に行われていたことを物語っている。再建なった太鼓楼には阿吽10対・計20の鬼面が乗せられている、内9鬼は近世初期のもので、そのまま使用され、他の11鬼は初期のものに統一し、すべて復元された。製作に当たったのは播州の誇る鬼師・小林平一師によるものであることは言うまでもない。

構造について管見すると、3間・4間の下層部に、方2間の入母屋を乗せた形をとり、何れも本瓦葺きである。望楼形式の城郭の隅やぐら風の建築で、外観は2重である。1層の平面は前後に2分し、前は板ばり、後は土間である。細部の

手法は、軸部は方柱で、組物は省いており、上層は方2間で、しっくい塗込めで、柱間装置は、腰長押・内法長押間に連子入りの花頭窓と格狭間を置く。大変めずらしい遺構である。(文化財指定理由書)

修理前の太鼓楼内部は、今までに大がかりな補修や補強が相当施されていた。中でも、30年程前、姫路市が太鼓楼の位置する一角を保育所として使用するにあたって、その安全性を確保するために、既に相当老朽化していた太鼓楼の内部に鉄骨構造材を組入れて補強するなどの処置を施したりしていた。内部の階段部などは欠落し、さらに1995年の兵庫県南部地震の被害も相当深刻で、正確な復元には困難を極めた。

従って、文化財として完全な再建を目指し、解体組み上げを実施するに当たっては、多くの事前準備に時間が費やされた。京都本願寺にも協力を頂き、本願寺太鼓楼の調査や御坊市日高別院の太鼓楼など、事前の調査を済ませ、欠落している細部を再構成し、できるだけ古材や古瓦を利用すべく検討が重ねられた。実際の解体組上工事には、姫路市教育委員会文化課の技術専門家でもあり、本徳寺の建築顧問でもある西村吉一師が陣頭指揮を執り、鹿島神崎共同企業体の元請けで、古建築の専門業者・金剛組が工事を担当し、1998年4月から1999年末まで、約2カ年を要して再建された。

内装や周辺整備、自動火災警報装置を含めて1億円を超える資金は、姫路市の文化財補助をはじめ、主に地域の有力企業の寄附により賄われた。こうして、地震直後は倒壊撤去の可能性の高かった瀕死の太鼓楼が、多くの播州人の強い働きかけによって息を吹き返したことは、戦後過酷な状況にあった本徳寺において特筆すべき出来事であろう。



太鼓楼に上げられた鬼面
小林平一師の製作による



古材を出来るだけ生かすために老朽化した部分のみを新しくして組立てている。太鼓楼西面柱部。